

海の放浪者

阿部牧郎



放浪者

阿部牧郎

海の放浪者

昭和53年11月8日 1刷

定価 八八〇円

著者 阿部 牧 郎

発行者 清水 大三郎

発行所 株式会社 サンケイ出版

東京都千代田区神田錦町三の一五(〒100)
TEL(東京)二九五〇九一五
大阪市北区梅田二の四の九(T530)
TEL(大阪)三四三一二二(代)

印刷所 サンケイ総合印刷

*万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

海の放浪者——目次

白骨のワルツ 7

ベナレスの銀輪 41

蜘蛛のキャンペーン 85

遙かなる樹海 111

波止浜丸の沈む日
153

海の放浪者
185

あとがき
257

阿部牧郎自選小説集

海の放浪者

白骨のワルツ

雨期でカルカッタは湿っていた。くすんだ煉瓦づくりの古めかしい家々も、ならんだ納屋のような商店街も、落葉やボロ屑の散らかった舗道も、ゆきかう中古車や二階建てバスの群れも、みんな青ずんだ泥にまぶされ、じわじわと小雨に打たれつつける。

焦茶色の肌の人々が傘をさしたり、雨に濡れたり、思い思いの方角へあるいていた。ターバン姿や袋のような民族服はごく一部で、大多数の男が白シャツのすそをズボンの外へたらし、女たちは洗いざらしのサリーをきている。五人に一人ははだしで、ほとんどの者がサンダルをはき、足指が泥まみれである。皮膚と泥の色が溶けあって人々の衣服や家なみににじみ、街は暗く、荒れはてていた。だが、異様な匂いと活気がある。人間がじつにたくさんいた。濡れて沈んだ街の上を、目のまわるほど数かきりない人々が、はつきり目的があるのかどうか、流れもなくうじゃうじゃ動きまわっている。

おはようジャパン。買物に案内するぜ。プリーズ、バクシー。一ルピーください。バクシー、バクシー。腹が

減ってるんだ。

二流ホテルを出たとたん、杉本は十数人の乞食や物売りにとりかこまれ、彼らを追い払いながらタクシーをとめて、

「××通り。キリスト教救貧院までいくらでいく」と運転手に声をかけた。

垢まみれの女乞食にさつきから腰を突つかれ通しで、はやく車に逃げこみたいのだが、旅行者に法外な料金を吹っかけるのが常識の国なので、乗る前に金額をたしかめておく必要がある。運転手ははたして相場の倍以上の金額を申し立てた。なんて厄介な国なんだ。すんなりタクシーに乗ることもできない。たえまないバクシー（おめぐみ）の声と不自由な英語に苛立ちながら、十分ちかくも杉本は料金を値切りつつけねばならなかった。

やっと話がつき、まわりに群れた大人子供が総がかりで車の扉をあける。上のほうを大人たちが、下のほうを子供たちがつかんで扉をあけ、杉本が座席に腰かけると、いつせいに手を突きだして、扉をあけた劣にたいするバクシーの請求である。

杉本は黙殺しようとしたが、車の窓から近々とのぞきこむ一人の子供の顔をみて、総毛立ってポケットの硬貨をつかみだし、その子にあたえた。その子供には鼻がな

いのだ。レプラである。欠け落ちた鼻肉ののこりがくさった梨の破片のような形状を呈し、それを割って軟骨が上向きの黒い穴をかたちづくっていた。

車が動きだし、杉本は安堵の息をついた。そして、この国へくるたび味わうやり場のない暗い憤りにさいなまれた。人々のこれほどの貧困をほうっておける為政者の神経が日本人には理解できない。工場を建て、店をふやし、ありあまる労働力をいくらでも活用できるだろうに、この国の為政者はなにもしないようにみえる。働くうにも仕事のない人々は、外国人旅行者にむらがつて、鞆をむしりとってはこび、車の扉をあけ、道案内の押売りをし、チップの種を自分でつくりだすより生きる道がないのである。多くの家族が、炭焼窯のような土造家屋に親子でひしめいて暮っていた。めぐまれた部類の職業であるタクシー運転手の月給が二百ルピー、邦貨たった七千円で、他の肉体労働者などは一月二千円にもならないのだ。飢えたり、病んだり、ゆき倒れの人がたくさん出る。なぜこんな窮状を権力者はほうっておくのか。杉本がいまさがしているサドウナという娘も、ひょっとすると、ゆき倒れの一人として救貧院に収容されているかもしれない。

やがてその救貧院に到着し、杉本は不愛想な運転手へ

料金を払って車をおりた。

樹木の垣にかこまれた古い団地アパートのようなその建物を祈る思いで一瞥して彼は門をくぐった。サドウナがここにいるかもしれない。胸を病み、衰弱しきって杉本を待っているかもしれないのだ。ペランダや窓辺で立ち働く白人の牧師や尼僧たちが、みなれぬ黄色人種の客を、手をとめてじつと眺めおろした。もとキリスト教徒の修道院だったが、カルカッタ市民の悲惨な暮しをみるにみかねてゆき倒れの人々の収容を開始したという施設である。玄関へ入ると、体熱、垢、分泌物、薬品などの匂いのまじりあった異臭が顔へおしよせてくる。こんなところにサドウナはいるのだろうか。収容された一人らしい骨と皮だけにやせた子供が、廊下から走ってきてバクシーをさけぶ。かつてイギリス人の住宅地だったらしい古びた白壁づくりの家なみにまじって、すこしもみおとりしない建物だったが、貧困と衰弱の気配がなかに充満するようである。

「サドウナ・トシャル。年齢は十六です。もし収容されているとしたら、この二週間以内のことだと思いますが——」

受付の尼僧へ杉本はせきこんで収容者名簿の点検を依頼した。サドウナの名を口に出すと、心臓のしめつけら

れる思いがする。

「あなたは——」

名簿をくりながら尼僧はたずねた。おそろしく鼻の大きな赫ら顔の中年女である。

「杉本雄一。日本の新聞記者です」

「患者とのご関係は」

「友達——。いや、婚約者です。日本からその娘を迎えにきました」

婚約したわけではないが、話をわかりよくするために杉本はそう答えた。

尼僧はじつと杉本をみつめ、*“婚約者”*とつぶやいてまた名簿に視線をおとした。青い目にかすかな軽侮の色が走り、インド娘と日本人青年の組合せが白人の目にどう映るかを杉本は思い知らされた。

「サドウナ・トシャル。これですね」

やがて尼僧は名簿の一すみを指し、ありましたか、と身を乗りだす杉本をみて、気の毒そうにかぶりをふつた。

サドウナの名の下に赤インクで細密な文字が書きこんである。半月前に彼女は収容され、四日目にどこかへ姿を消していた。重症の肺結核で、あるくことさえおぼつかないのに、ゆくあてがあるのかどうか、彼女はここを

飛びだしてしまったのだ。

「そんな——。ここでは重症の結核患者を好き勝手に行動させるんですか」

歓喜が落胆に逆転して杉本は感情的になり、尼僧へ喰ってかかった。ここがインドであることを一瞬わすれてしまっていた。

「ここは病院ではありません」無表情に尼僧は答えた。

「救貧院です。満足の医療施設も看護体制もとのつていません。私たちはゆき倒れの人々に最低限必要な手当をするだけです。それ以上のことは不可能です」

「マイシンもないんですか。マイシンさえ打てば結核なんか怖い病気じゃないのに」

「その程度の手当なら可能です。しかし、四日いたただけで出ていってしまうような患者をどうすることもできないでしょう」

杉本は言葉につまり、だまりこんだ。

たしかにここは病院ではない。医者にかかる金もなく、なんの保護もつけられぬままゆき倒れた人々を、宗教心に富む白人が介抱する場所にすぎなかった。完全看護を望むほうがむりなのだ。だが、それにしてもせっかくのベッドと食事に目もくれず、サドウナはどこへいったのか。そばで寝ている人たちへ、一言ぐらい

ゆくさを告げていかなかったのだろうか。

その疑問を杉本が口にする、受付の尼僧は立つて廊下の奥へ消えた。そして、三十歳ぐらいの牧師をつれて帰ってきた。牧師は僧服の上に白い上っぱりをつけた牧師である。

「お話はききました。なかをご案内しましょう。この街の人々の悲惨な状態を日本の読者へ伝えてください」

牧師はさきに立って、杉本をまず五十ばかりのベッドのならば病室へつれていった。

なかへ入ると、玄関にただよっていた異臭がさらに濃く、熱をはらんで杉本へおそいかかり、高さ三十センチほどの簡易ベッドに横たわる焦茶色の肉体の群れがいちめんに床を埋めていた。九割が白髪、銀髪の老人で、ほんの一部子供がいる。老人たちは目をとじたり、眼球をうつろに露呈したり、多くは顔をひげで埋め、脂気なくやせおとろえて、骨格のまわりに皮膚がだぶついている。声も身動きもなく彼らは寝てわずかに呼吸しているが、人というより物体にちかく、茫然と死の気配の底に沈んでいた。手足の爪が紫色を呈し、医師にリンゲルを注射されている者も、キノコのような吹出物が全身に出ている者も、呼吸とともに異臭をはなつだけが仕事であ

る。尼僧に排尿をうながされても応じる力もないくせに、鼻が高く、眉と目が接近した老人たちの顔にはみな一種の威厳があつて、枯木のような肉体をいっそう衰弱して感じさせた。市内にうごめくおびただしい人の群れの、廃物がここに回収され、なんのドラマもなく死を待っている。糧をもとめて必死であがく街の喧騒が嘘のように、静寂がここにはあふれていた。

「おわかりでしょう。われわれはリンゲルでせいっぱいです。ストレプトマイシンは病院の仕事なんだ」

声もない杉本をふり返ってから、牧師は今度は女の病室へ案内してくれた。

老人が老婆に変わっただけのことだった。ただ老婆たちはサリーや布でつつしみぶかく肌を覆って横たわり、緑、青など、あせてはいるが病室にはわずかな色どりがあつた。

要するにここは、望みのない人々を屋根の下、ベッドの上で死なせるための施設にすぎないのだ。そう思うと、杉本はいくぶん元気が回復してきた。サドウナは死んでゆく老婆たちに同化できず、自分だけはどうしても生きたいという意欲にかられてここをぬけだしたのかもしれないのだ。

「このベッドに彼女は寝ていました。喀血してかなり衰

弱していたようです」

しわに埋まった一人の老婆が眠っている簡易ベッドを指して、牧師は杉本の希望を踏みにじる事実を告げた。

サドウナは咯血して波止場ちかくの路地に倒れているところを発見、収容された。いま収容中の瀕死の男女約四百名のうち若い女は十名もいないので、牧師は彼女をよくおぼえていた。サドウナは食欲もあり、身辺の雑用にも他人の手は借りなかったが、咯血が止まないので、絶対安静の状態に変わりはなかったという。ひどい無茶をするものだ、あの娘は救いの手さえ拒んでしまった、と牧師は嘆かわしそうに首をふった。

「近くのベッドの人たちに、サドウナのことをなにか知らないか訊いてみてください」

杉本にいわれて、牧師はとなり近所の老婆たちへ大声で質問してまわった。

が、老婆たちはどんよりと目をあけ、しぶしぶ身動きするだけで、質問の意味さえ理解できない様子である。彼女らが動く、と空気が揺れて新鮮な臭気が立ちのぼり、やせた五体がかさかさ鳴るようで、かろうじて生き物の気配があった。一人として他人事に係わりあえる状態ではなさそう。牧師はだまって肩をすくめ、杉本もあきらめて病室を出た。墓場へ人をさがしにきたような

ひどい徒労感に杉本はおそわれていた。

「お役に立てなくて残念です」玄関のそばで牧師はいった。「いいにくいことだが、あの娘の消息は市役所でわかると思います」

「市役所で——なぜ」

「死体で発見された行路病者は市役所へ収容されます。病状からいって、サドウナが生きているとは私には思えないのです。死体は市役所に一週間保管されたあとで埋葬される。すぐいけば対面できると思います」

なんという情容赦のないことを平然と口にする牧師なのだ。杉本は腹立たしさをこめて、つるつると鬚りのない牧師の顔をみつめた。だが、すぐに氣をとりのおして挨拶し、いそぎ足で建物を出た。もしサドウナが死んでいたら、彼女を日本へ移住させるためのさまざまな困難からすぐに解放されるのだが、という考えが頭をかすめたからだ。せっかくわざわざインドへきたのだ、最後までやり通さなければ、と杉本は自分にいきかせた。日本の読者へよろしく、われわれは援助を期待している、と牧師の声が背後から追いかけてきた。

2

サドウナ・トシヤール。この国ではめずらしい丸顔

で、生き生きと目が大きく、少年のようにしなやかな手足をもったあの娘と知りあったのは、一年前、過剰人口になやむこの国の実状の取材にきたときのことだった。

日本からカルカッタへきて三日目、杉本はひどい災難に遭った。この国の人々は外国人に金品をねだりはそのが、殺生や暴力行為が宗教できびしく排撃されているので強盗、恐喝などはやらないという事前の知識が裏目に出た事件だった。

カルカッタのあるスラムを、杉本は一人でみてまわっていた。家というより朽ちかけた泥まみれの小屋がならんでいた。こんなところによく人が住めるものだと思わせる腐臭、不潔、非衛生、湿気、暗黒の積みかさねの光景に氣を吞まれてあるくうち、おそろしくしつこい乞食に彼はつきまとわれた。ボロをきた坊主頭の男が杉本の二の腕にとりつき、爪を立ててつねりながら唸り声を立てるのである。払っても払ってもまつわりつき、つねりながら歯をむいて唸る。

性質温順な国民のこれが最大の威嚇なのかと杉本は最初おかしかったが、あまりしつこいので声を荒げその坊主頭を突き飛ばした。すると、男は戦闘的な構えになり、杉本はカメラを盗まれぬよう紐を腕に巻きつけて、男をどうあしらい、集まってきた弥次馬のあいだをどう

すりぬけて脱出するか、いそいで思案する羽目になった。

そのときさっきから面白そうにあとをついてきた一人の娘が緑色のサリーをひるがえして杉本の前へ飛びだし、この男は英語が話せない、暮しにとても困っている、一ルピーめぐんでやってくれと坊主頭を指して早口に話した。大きな目をかがやかせ、ぱっと花の咲いたような華やかな笑顔で話す娘なので、杉本も緊張をとい

て、あるきながらその娘の相手をすることにした。おれは金持じゃない。理由もなしにほどこしをする義務はない。そう杉本が答えると、

「ノー。ジャパニーズ、オール、リッチ」

娘は朗らかにいい返した。

日本人は金持、私たちは貧乏、ほどこしの理由はじゅうぶんだというわけである。この国の論理は相手の事情がどうあるかと、つねに自分の論理を優先させる。神経が疲れるばかりなので、この種のいいがかりを杉本は黙殺することにきめていたが、娘が魅力的なので話をさらにつづけたくなった。女がめつたに生産の場や社交の場に顔を出さないお国柄で、女と口をきくのがインドへきてはじめてという事情もあった。

「たしかにおれは、きみたちより金持かもしれない。し